

第一回の様に培地を調製し実法により滅菌を行い昭和27.2.18 椎茸菌を接種し菌後一週同日より菌糸の伸長測定を開始した。菌糸の伸長度の測定方法は試験管の斜面寒天培養基の表面に積り物に接近して菌糸の最大直径を測定し各試験管三本の平均値を求めた。

第二表 菌糸の伸長度各

培地 採集日		還元鉄					酸化第二鉄					対照
		A	B	C	D	E	A'	B'	C'	D'	E'	
第一回 27.2.25	平均値	45	47	38	45	47	49.6	43	42	41	41	47
	誤差	±2	±4	±6	±16	±4	±18	±16	±3	±16	±0.5	±2
第二回 27.2.27	平均値	82	78.6	80.6	76.6	86	81	76.6	75	71	73	83.5
	誤差	±1	±3	±3	±3.2	±5	±2.6	±2.5	±5	±0.8	±2.5	±2.5
第三回 27.3.1	平均値	100.6	91.5	100.6	99	101	104.5	91	98	96.5	90	99
	誤差	±0.8	±1	±2	±1.3	±3	±0.5	±0.6	0	±0.5	±2.5	±1.2

培地に添加された還元鉄或は酸化第二鉄は酵母から抽出したタンニンと化合して黑色沈澱物体様のタンニン環鉄を生ずるが上記の第二表から観ると椎茸菌の伸長はさして影響が小さい様に窺知される。

## 気候因子よりみた椎茸栽培技術について

宮崎県産椎茸栽培研究会 野村 弘 規  
山 元 彰

### 1. 前文

気候因子より地域区分を行い椎茸栽培を論じたものに小木、川田、櫻村、荒川氏等があり特に荒川氏は植物分布と関連し積算温度、積算降水量を以て論じている。筆者も前記の諸氏に倣い九州地方に於ける気候因子差から椎茸栽培技術の面にも関連を生ずべきことあるを想像し以下地域区分を行つてみた。

### 2. 九州地方の気候図表

九州は古来椎茸の生産地であつて川田氏等の言う適地型の *Climograph* (気候図表) を指すものであるが、然しこれを更に細分するときには所謂北九州型、南九州型及太平洋岸型の三地区に区分できる。北九州型は7~8月にかけて降水量が減少し九月に再び増大して全体の図型「フ」の字型を呈し他の二型は川田氏等の云う「ノ」の字型を示すが南九州型は概して幅広く太平洋岸型と区別できるのである。その所屬は長崎県島原附近と熊本、鹿児島両県が南九州型に属し、宮崎県と大分県南部が太平洋岸型を呈し、他の北部地

域全体が北九州型を表はしている。

### 3. 宮崎県の気候条件

上の如く宮崎県は太平洋岸型を呈しているが年平均気温、積算気温及気温偏差を考えると別表の様に戻に沿岸平地型と内陸山地型の二つの地域に分けられる。此表にて降水量は両者間に左程の差は認め得ないが、偏差は山地型に於て可なり大である。

### 4. 栽培技術面に於ける考察

現在殆んど同一方式により栽培が行はれているが斯る気候差を考えると当然其技術面にも相違を主しなければならぬ筈である。即ち山地型地方では降水量の偏差は平地型のそれより大なので適温適湿の条件と共に雑菌繁殖に巾広い好条件を提供する。

亦平地型は好高温度群の苗の繁殖に適した条件をもたらすのである。

技術の詳細については各地条件を異にするため一概には云えないが積木伏込に於て平地型では気温の低下を主眼とした作業を必要とし平地型では気温の低下を主眼とした作業を必要とし山地型では適湿を予防すべくに掛ける必要がある。即ち積木の長さ、笠木の厚さ伏込の形などに考慮を要するのである。

### 5. 結 論

宮崎県全域は一応適地型として認められるが細部を検討すると栽培技術に差異を考えねばならない。然し栽培地の環境条件を気温降水量のみでなく日照 日射 湿度などに商運するほか局部気候、微気候の因子も多分に影響する故この考察のみで決定することはできない。只気候因子中気温と降水量を採り上げれば宮崎県下を平地型、山地型の二つの地域に区分できるものと考える。

表 宮崎県下の二つの地域の気候型

目	地 域	沿岸平地型	内陸山地型
年平均気温	18.5°以上C°	18.7 ± 0.2	17.0 ± 0.6
冬期積算気温	33°以上C°	36.6 ± 1.6	27.2 ± 2.9
春期 "	38°以上C°	41.0 ± 0.8	33.7 ± 2.0
気温偏差	C°	5.99 ± 0.27	6.78 ± 0.13
平均年降水量	mm	2473.0	2473.8
降水量偏差	mm	86.38 ± 5.61	103.28 ± 11.17